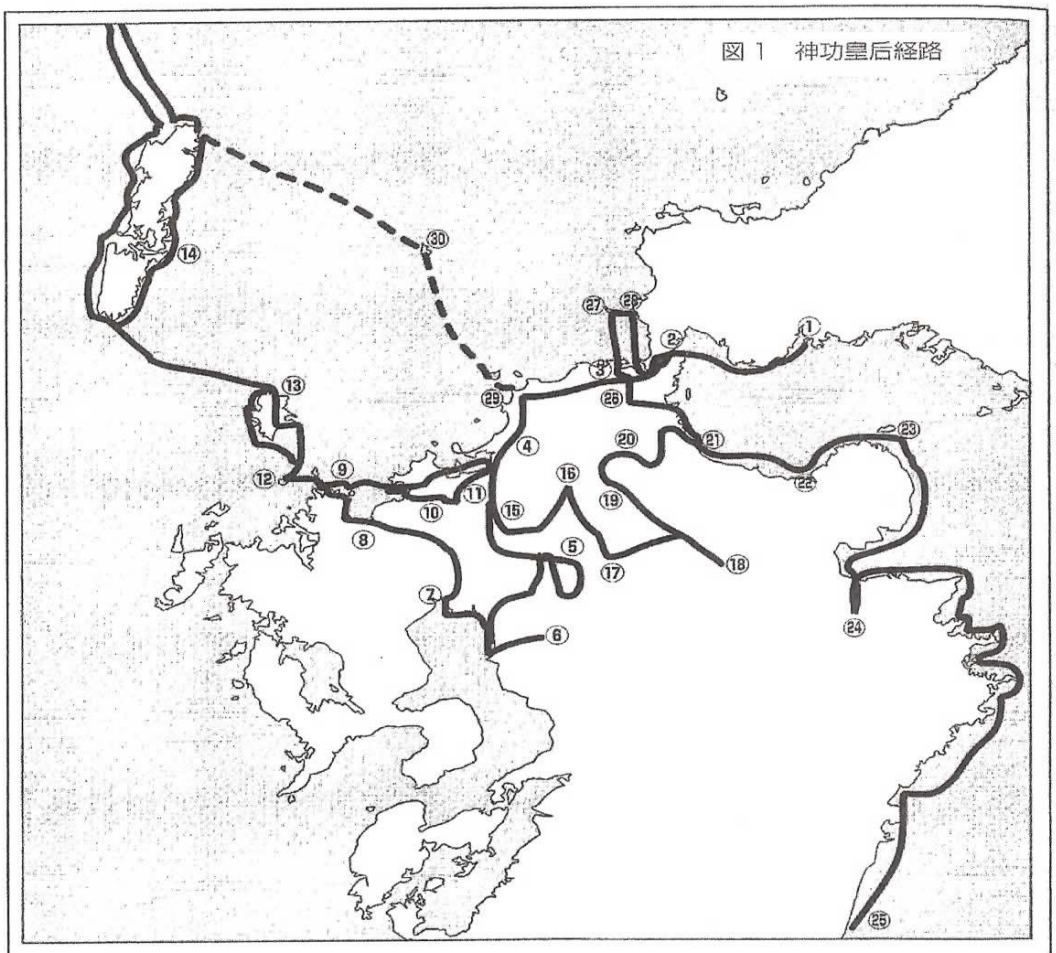
平成 24 年 11 月 10 日（土）13：30～15：00
福岡県立美術館 4 階・視聴覚室

河村哲夫

北部九州における神功皇后伝承
～第 4 回　筑豊・豊前の神功皇后伝承～

1、北部九州における神功皇后の足跡



① 佐波
② 豊浦宮（忌宮神社）
③ 岡湊
④ 香椎宮
⑤ 甘木・朝倉
⑥ 山門
⑦ 堀江神社
⑧ 玉島里
⑨ 呼子
⑩ 糸島
⑪ 裂田溝
⑫ 馬渡島
⑬ 壱岐（往路は陸路、帰路は西岸）
⑭ 対馬（往路は東岸、帰路は西岸）
⑮ 宇美
⑯ 庄内（綱分八幡宮）
⑰ 嘉麻峠
⑱ 英彦山
⑲ 田川
⑳ 香春
㉑ 行橋
㉒ 宇佐
㉓ 姫島
㉔ 寒田（西寒田神社）
㉕ 都農（都農神社）
㉖ 到津
㉗ 蓋井島
㉘ 吉母
㉙ 宗像
㉚ 沖ノ島

1、朝鮮からの帰還

(1)対馬

・豊

豊という地名は、神功皇后が新羅からの帰路に矛と剣をこの地に献納して、「本邦の豊かならんこと」を祝したからであるという。

・椎根島

豊の海岸近くの小島に島大国魂神社がある。延喜式内社で、素戔嗚命が祭神。社伝によると、素戔嗚命が子の大己貴命と五十猛命を率いて新羅の曽尺茂梨の地へ渡ったときの行宮の地であるという。島は陸とつながっており、陸繋部は不通浜と呼ばれ、海岸には遥拝所が設けられ、何人といえども立ち入ることのできない聖なる島とされている。神功皇后は、この島で天神地祇に祈りを捧げ、矛と剣を奉納し、国の未来を祝ったという。

・三根湾の木坂

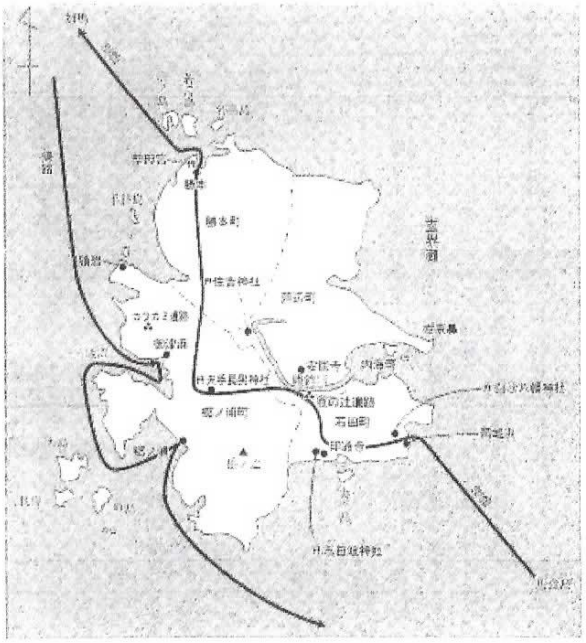
海神神社（上県郡峰町木坂字伊豆山）があり、本八幡宮（八幡本宮あるいは上津八幡宮）と号したが、それは神功皇后が新羅親征の帰路、幡八流を祀らせたからという。

・阿連

神功皇后に従って新羅に渡った雷大臣が、帰途村馬にとどまって県直となり、亀卜の術を伝えたという。雷大臣とは中臣烏賊津連のことである。その子孫が卜部となり、数十家に分かれたが、この阿連の神主の橘氏が卜部の本流である。阿連川の下流に雷大臣を祭神とする雷命神社があり、「ライメイ」神社と読むが、延喜式神名帳では「イカツチ」と訓を打っている。若宮神社は雷大臣の子の本大臣と小大臣を祭神としている。

・大野崎

『津島紀事』には、「雷大臣の居れる館の跡、阿連の西南大野壇にあり、大野崎はその崎岸なり。雷大臣は神代の亀卜を伝ふる本州卜部の祖、今も大野崎をもって霊亀を捕る所となす」とある。



(2)壱岐

・勝本

神功皇后が勝利を得て帰ったからであるという。聖母神社の社伝には、「当社は神功皇后三韓征伐御往来のときに着かれた津で、この地に異賊の首を埋め、その上に

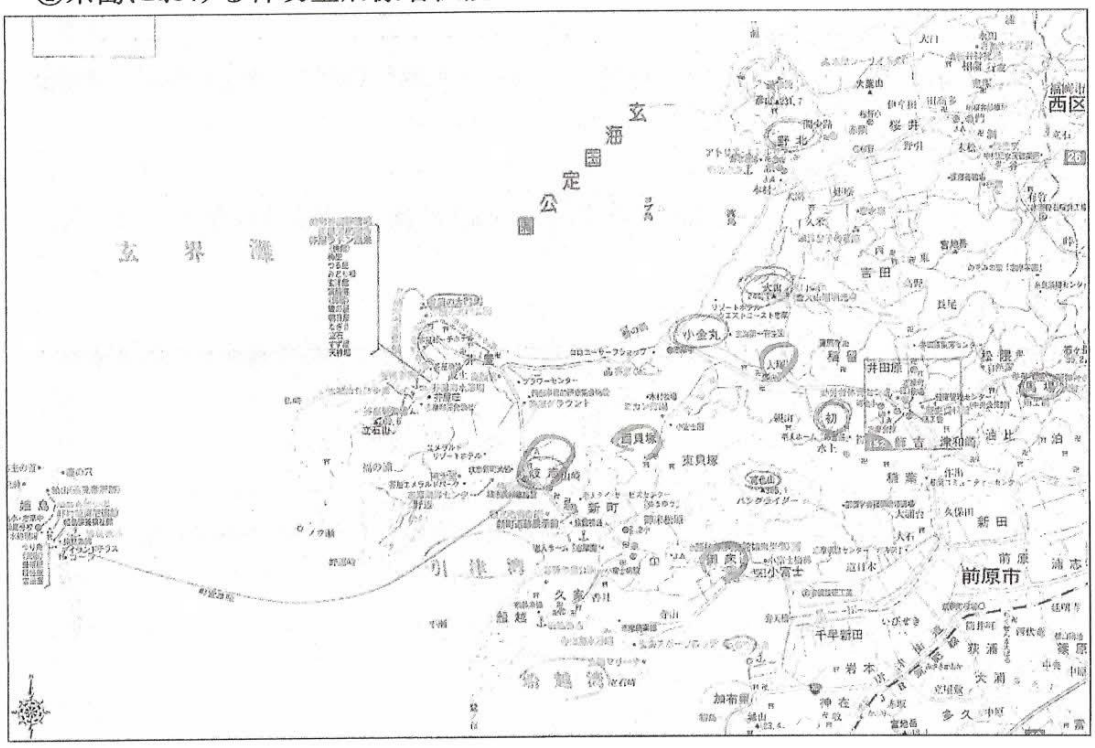
神符を掛け、後々まで異賊の害を断絶させることを誓われた」とある。

・半城湾の御津浜

神功皇后は、住吉三神の御加護に感謝し、御津浜に住吉神社を創建した。後に芦辺町の現在地に遷座されたが、住吉神社跡には、八幡神社（旧号は御津八幡宮、郷ノ浦町大浦触字軍越）が祀られた。住吉神社の社伝によると、「そもそも壱岐国は往古三韓交通の要衝にあたり、ともすれば敵国襲来の門口となるので、神功皇后は三韓出兵から凱旋なさるとき、舟師を当国に駐屯させられ、鎮護の神として住吉大神および八千曳神（大国主神）を祭られ、敵国を降伏させるため軍越神事を定め、随臣の安倍介麿を駐在させ、壱岐一国を賜い、永く祭祀を司ることとされた」とある。安倍氏代々の子孫の主宰により、一月十七日、五月二十八日（もと四月二十八日）、十月二十七日に「軍越神事」が行われる。戌亥（北西）の方角、すなわち朝鮮の方角に向かって鉾を振り、三韓降伏のための神儀を行い、一月十七日と十月二十七日の二回はその鉾を御津浜に遷座するならわしとなっている。神儀を行う場所は、住吉軍越丘（芦辺町住吉後触）、深江軍越丘（芦辺町深江栄触）、志原軍越丘（郷ノ浦町志原西触字平）の三つの丘とされ、それぞれの場所に軍越神社が祀られている。

(3)壱岐から九州本土へ――このとき暴風雨に遭遇して漂着

①糸島における神功皇后漂着伝説



・火山

玄界灘を漂流中、真っ暗やみで方角がわからなくなったとき、神功皇后が神に祈ったところ、火山から火が上がったので無事に帰還できたという。

・野北

白木神社は、神功皇后が新羅から凱旋したとき、その船が着いたところという。白木とは新羅のことである。

・小金丸

海浜に鎧石がある。神功皇后が凱旋したとき上陸し、着ていた鎧が草摺石となり、鎧石と呼ばれるようになったという。水先案内を努めた老人がいて、その老人の適切な指示で無事に到着することができたので、神功皇后はその老人の手を取って、「汝、瀬を知る老翁かな」とほめたたえ、「瀬知」という姓を与えたという。

・輿掛神社

神功皇后は、小金丸の海浜に仮宮をつくったが、石の上に神輿を献納した石は腰掛石と呼ばれ、輿掛神社が建てられている。

・小金丸の旗山

神功皇后凱旋のとき、旗を建てた所が旗山神社。火山の麓に横五尺（約一・五㍍）、高さ七尺（約一㍍）ばかりの平石があり、神功皇后が帰国したとき、腰掛けた石であるという。

②津屋崎における神功漂着伝説

・渡の楯崎(福津市)

流した神功皇后の船は津屋崎町の渡の楯崎に漂着したという。

・鼓島

鼓島で勝利の太鼓を叩き、京泊に船を着け、薬師岳北麓の楯崎に上陸して勝利の楯を奉納した。それが石となったのが楯崎神社の御神体であるという。

・勝浦

山の上に登って、「かつら」と宣したので、この地を勝浦と呼ぶようになったという。

(4)博多湾岸の伝承

・名島（福岡市東区)の帆柱石

神功皇后が異国より帰ったとき、船が名島に着いた。神功皇后の御座船の帆柱をあたりの海辺に捨て置いていたところ、石になったという。

・姪浜

『香椎宮古記』には、「神功皇后が三韓よりお帰りなさったとき、姪浜の祖(あこめ)浜より上陸され、御船は名島に着いた。随行していた人々が東の隅から上陸した。留守を命じられた人々がやってきて、新羅合戦の次第を尋ねたところ、「異賊を皆打ちぬ」と答えたので、この地を皆打浜と呼ぶようになった」という。多々良川河口にある皆打浜（福岡市東区松崎）の由来。

・三苫（福岡市東区）

この浜に接岸した神功皇后の船の飲料水が尽きてしまい、神功皇后たちは喉の乾きに苦しんでいた。一同困っていると、神が現われ、地面に馬の轡(くつわ)を置いて立ち去った。人々が不思議に思って神功皇后に報告すると、「それは、水の源かもしれない」と、土を掘ると、

水が湧いてきた。神功皇后は大層喜ばれ、その水を飲み、随行していた者たちも飲んで元気を取り戻した。後にその轡を山上に納めて轡納山と名づけ、その井戸を「くつわ水」と呼ぶようになった。名島の海岸に砧板瀬というところがあるが、神功皇后はここで戦勝の祝宴を開いたという（『飛廉起風』）。

・志賀島の勝馬

神功皇后が凱旋し、この場所で馬に乗って勝ちどきを上げたので、勝馬・勝山と呼ぶようになったという。

・弘浦

神功皇后は勝馬から弘浦に集結したが、予想していたよりも広い海岸であったので、弘浦と名づけたという。そして、そこから船で姪浜に向かい、鳥飼氏の歓迎夕食会に臨んだという。

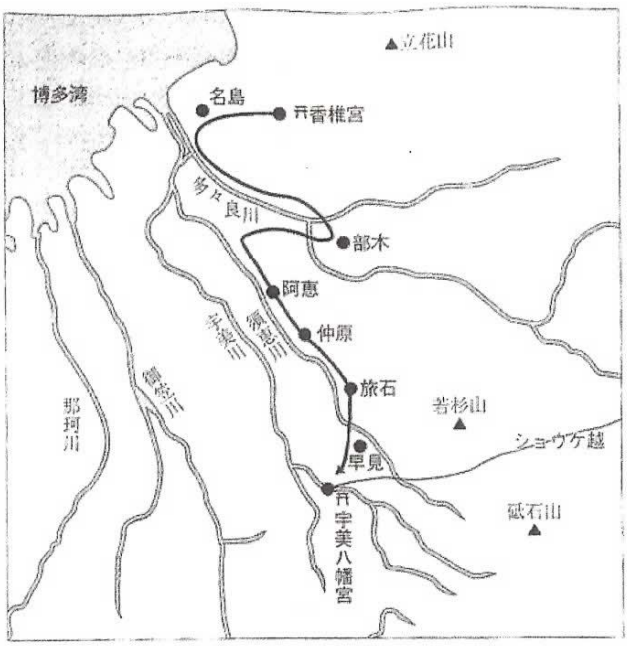
・鳥飼八幡宮

祭神は神功皇后・応神天皇・玉依姫。社伝によれば、神功皇后が三韓より十二月四日に帰国し、姪浜に上陸し、夕暮れになって鳥飼村平山に至った際、鳥飼氏が夕食の膳を献上した。後に廟を建てて若八幡と号したという。現在の鳥飼八幡宮は、黒田長政が福岡城を築くとき移築されたものである。茶屋の古宮の跡には、大正十一年三月に「神功皇后御駐輦之跡」という石碑が建てられている。ちなみに、神功皇后は姪浜に上陸した神功皇后は、濡れた衣を脱いで乾かした。このため「祢（あこめ）の浜」と呼んだのが転じて姪浜と呼ぶようになったという（『筑前国続風土記』『太宰管内志』）。

(5)香椎宮へ帰還

・香椎宮での祭祀

香椎宮にもどった神功皇后は、剣・鉾・杖を地中に埋め、鎧の袖に差していた綾杉の枝を自ら植えた。そして、一枝を若杉山に植えたという。



2、香椎から宇美へ

香椎宮に帰還した神功皇后は、出産の時期が迫ったことを知って、宇美に向った。

『日本書紀』によると、神功皇后は十二月十四日に応神天皇を筑紫で産んだとしている。『古事記』には、「筑紫の国にお渡りになって、その御子をお生みあそばされたところを宇美と名づけました」とある。

・蒲田神社（福岡市東区）

社伝によると、神功皇后は出産前にこの蒲田村の「別火の里」を訪れ、火を焚いて、「どうか皇子が無事に生まれ、よく育ちますように」と、天神地祇・八百万神に祈りを捧げたという。別火は今では「部木」と書かれる。

・阿恵（糟屋郡粕屋町）の日守石

日守石と呼ばれる石があった。八幡宮の林の東側にあり、神功皇后が原田方面からやってきて村に着いたとき、日守石に腰かけて休息したという。このとき、神功皇后が「この石は、日を守り続けてどれくらいの時がたったのだろうか」と言ったことから日守石と呼ぶようになったという。その後村人たちは「日守八幡神社」を建てて神功皇后を祀った。

・仲原（糟屋郡粕屋町）の駕輿八幡宮

元禄十（一六九七）年に築造され、筑前三大池の一つに数えられている駕輿丁池があり、応神天皇と神功皇后などを祭神とする駕輿八幡宮がある。『筑前国続風土記』には、「神功皇后が香椎宮から宇美に行かれたとき、この地の村人が神輿をかついだことから、駕輿丁の名が生まれた。神功皇后がしばらく休憩なさった場所に後世神社を建てたところから、駕輿八幡というようになった」という。

・旅石八幡宮（糟屋郡須恵町旅石）

社伝によると、「神功皇后、日守にて日の早晩を伺はせたまひ、その後ここ（旅石）に来りたまふ」という。気分がすぐれず、「あな、わびしや」と神功皇后が苦しんでいったため、この地は「わびし」と呼ばれるようになったが、後になまって旅石というようになったいい、別の伝承では、神功皇后が食事をした石を「たべいし」と呼んだためであるという。

・早見(糟屋郡宇美町)

激しい陣痛に襲われ始めた神功皇后が、「産屋は、いずくぞ」と聞いたところ、側に付き従っていた者たちが宇美八幡宮の方向を指で示した。神功皇后は、「早や見ゆる」と喜んでいった。このため、その土地を「早見の里」と呼ぶようになったという。

・宇美八幡宮

宇美八幡宮には神功皇后出産にまつわるさまざまな伝承が残っている。

①子安の木(あるいは槐の木)

神功皇后は槐の木の枝を折って、その枝に取りすがって無事出産することができたため、出産後その枝を逆さにして地に植えたところ、それがやがて大木に成長したという。

②産湯の井戸

神功皇后が出産後産湯に用いた井戸といわれている。妊娠した女性がこの井戸の水を持ち帰って飲めば、安産であるという。

③湯蓋の森

神功皇后出産の折、東南の高い山（宝満山）に「益影の井」と呼ばれる霊水があり、その水を汲んできて産湯の水としたという。御産所の側に楠があり、その楠の枝が湯舟の蓋のように垂れていた。神功皇后はその大楠の下で産湯を用いた。その後楠が大木に成長し、

枝葉がことに美しく繁茂したため、「湯蓋の森」と呼ぶようになったという。

④衣掛の森

神功皇后が産衣をこの木の枝に掛けたという。

⑤胞衣が浦

胎児を包んでいた胞衣を御産所の後ろの川で濯いだところ、川の魚が胞衣の血を呑んだ。このため、この川の魚はことさら赤いという。胞衣は境内から北へ二町（約二百㍍）の神苑内の山中に納められたが、その場所を「胞衣が浦」と呼んだという。

⑥逆杉

神功皇后が昼食の箸に用いた杉の枝を逆さに植えたところ、成長したものであるという。

⑦高麗橋

神功皇后が朝鮮から船に乗せて持ち帰ったものであるという。

⑧湯方神社

祭神は湯方殿。応神天皇を取り上げた産婆を祭る。現在でも生まれた子の氏名と生年月日などを書いた無数の子安石が奉納されており、出産前に妊婦がその石を一個持ち帰り、出産後に一個の石を添えて返納するならわしがある。また、子安石を手に持って妊娠した子の男女を占う風習もある。

3、宇美から筑豊へ

神功皇后は十二月十四日に応神天皇を産んだが、『日本書紀』には、「新羅を討たれて翌年二月、皇后は群卿百寮を率いて、穴門の豊浦宮に移られた」とあり、出産後一カ月半ほど九州に留まっただけで、穴門の豊浦宮に移動している。出産後は宇美を拠点にしていたので、神功皇后は九州へ来るときとは別のルートで穴門へ向かった。

・ショウケ越え

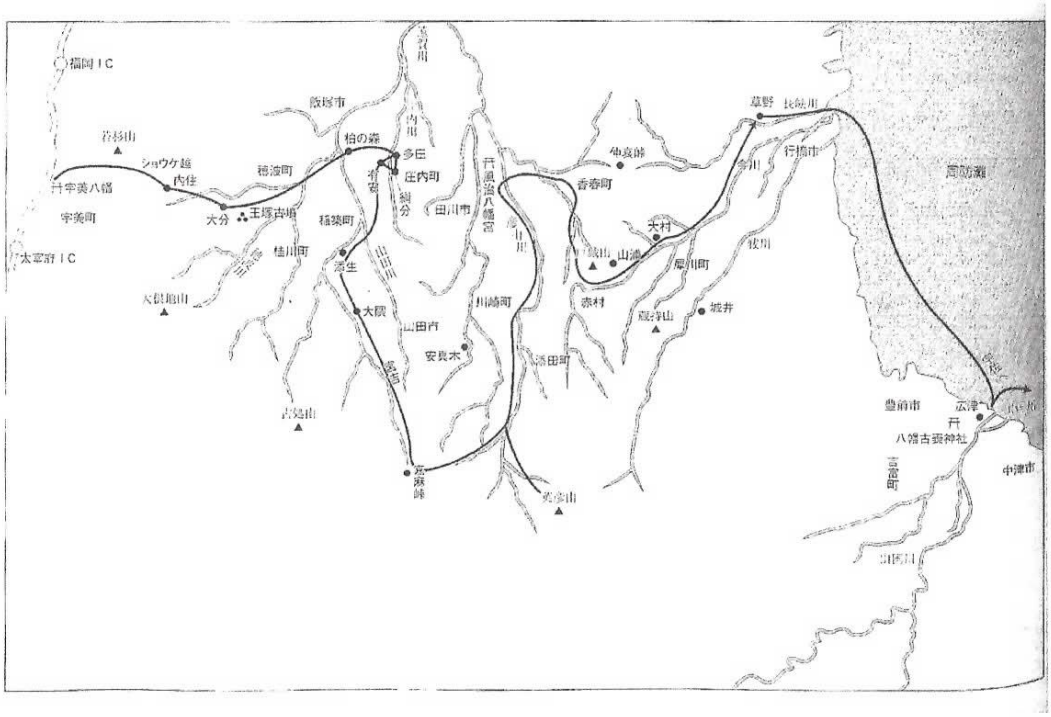
糟屋郡と嘉穂郡の間にある標高約五〇〇㍍の峠。ショウケとは竹の籠のこと。神功皇后が幼い応神天皇をショウケに寝かせて宇美から筑穂町大分へ越えていったため、「ショウケ越え」と呼ばれるようになったという。

・乳呑坂

神功皇后は袴を脱ぎ、乳呑坂を通過するとき、応神天皇に乳を飲ませたという。

・大野

神功皇后が「山中には珍しき大いなる野なり」と感想をもらしたため大野という地名になったという。



・内住

集落内の懸尾城跡の東の下に、三尺五、六寸（約一㍍）の四角形の「腰掛け石」があり、神功皇后がその石に腰掛けて休息したという。

・大分八幡宮（筑穂町）

『筑前国続風土記』は、「宇美村で応神天皇をお産みになり、翌年の春、都に上るため皇子と一緒に宇美村から大口嶺の乳呑坂を越え、御腰掛け石を過ぎて、この土地にとどまられた。すなわち大分八幡宮のあるところである。この地を宮の浦という」と書いている。

神功皇后はこの地でそれまで付き従ってきた軍兵を故郷に帰らせ、また各地の県主や村主たちを任命して派遣したため、「大分」と呼ぶようになったという。もともとは「おおわけ」と訓で読み、そのうちに音読みで「だいぶ」と読むようになった。

延長元（九二三）年に箱崎宮（福岡市東区）に遷座された。もともとは現在地の後方の岳の宮というところにあったが、戦国武将の秋月種実が、天正五（一五七七）年に現在地に移設したという。

・穂波

大分で軍を解いて将兵と別れるときに強い風が吹きつけたのを見て、神功皇后が「帆波、激し」といったという。また、大分から杉山に移るとき、神功皇后は稲わらを敷いて皇子と休み、「われもまた、船の帆並をそろえて異国に勝ちたり」といったからともいう。一説には穂波を通ったとき、稲が実って風にそよいでいるのを見て、神功皇后が、「よき穂波かな」といったからであるとする。

・嚢租八幡宮(飯塚市宮町)

嚢租とは、納祖のこと。租税を納める役所のことである。神功皇后は「嚢租の社」の「壇

の上」において祭壇を設けて神々に祈り、戦勝報告を行ったという。『嚢阻八幡縁起』によると、この地で兵士たちを郷里に帰すとき、「いつか、逢うべし」と兵士たちが別れを惜しんだことから、飯塚という地名が生まれたという。

・柏の森

神功皇后はそこで休憩したが、その森があまりにも美しかったため、「ああ、美しきかな、柏の森」と感嘆したという。

・笠松峠

栢の森からこの峠にさしかかったとき、にわかに雨が降ってきたので松の木の下で雨宿りをした。神功皇后は、「これぞよき笠かな」と喜んだので、笠松峠と呼ばれるようになったという。

・大日寺（飯塚市）

この村には大きな楠があり、神功皇后はこの地に大直日神（大直毗神）を祀った。そのためこの村は大日村と呼ばれるようになったという。

・綱分八幡宮(庄内町字綱分)

『綱分八幡宮社記』によると、神功皇后はかごを止め、応神天皇に乳を飲ませながら、東の方の山を眺められ、山の名を尋ねられた。村長が進み出て、かの山は金石山といい、麓の村を金丸と答えた。すると神功皇后は、「この山は、三面の形が自然の玉のようで、霊山である。われは婦女の身で滄海を渡り、韓国を従え、この西国を静め、皇子を産むことができたのは、みな神祀のおかげである。この霊山のふもとでお祓いをいたそう」といい、武内宿禰が祭祀の場所を選び、金工に三つの剣をつくらせ、神功皇后は皇子とともに行宮に入り、兵士に四方を守らせ、東南の二つの山の間の道に関所を置き、そののち神功皇后は天神地祇に祈ったという。村人たちはいろいろな物を献納し、日夜心の限りを尽くしたので、神功皇后はその誠意を愛で、「この郷はずっと栄えるであろう」といい、また安産に恵まれるよう、宇美八幡宮の槐の枝に掛けてきた産綱をこの村に分け与えた。これより金丸を綱分というようになったという。

・多田（庄内町）

『綱分八幡宮社記』によると、神功皇后が潮井川で身を清めた際に、「この川は、多くの田をうるおすであろう」といったという。

・有安（庄内町）

『綱分八幡宮社記』によると、神功皇后が多田の潮井川で楔をされ、『水有り、田安し』、すなわち、『この川の水が有るため、田の用水は安心である』といわれたという。

・漆生（稲築町）

応神天皇・神功皇后・比売大神を祭神とする稲築（漆生）八幡宮がある。この地で神功皇后は休憩したが、村人たちが稲を敷いて御座所とし、後にその稲を埋め、神社を建てたことから稲築と呼ぶようになったという。

・宮吉（嘉穂町）

この地で皇子の応神天皇が泣きやまなかった。それを見た農夫が柳の枝に団子をさして皇子に献上した。このため、この地を「ぜぜ野」と呼んだという。「ぜぜ」とは、子供が駄々をこねるという意味という。宮吉には、応神天皇・神功皇后・玉依姫を祭神とする宮吉八幡宮がある。別名「ぜぜ野八幡宮」。祭日には、村人たちが社殿の後で柳の枝に団子をさして食べるならわしがあった。

・嘉麻峠（嘉穂町・小石原村）

峠の南方の六田（牟田）というところで、応神天皇が手にしていた柳の枝を田のあぜに立てた。このため、この地には柳の木が多く植えられ、「団子柳」と呼ばれるようになった。

・英彦山神宮

社伝によると、「そもそも、二面の兜の由来は、第十四代仲哀天皇の皇后が先帝の御意志を継がれて、征伐のため自ら三韓に赴かれるとき、長門の豊浦宮で武内宿禰に仰せられて甲冑を作られた。武内宿禰はひそかに神功皇后のお姿を見て三韓の者どもが侮るにちがいないと思われ、いかめしい兜を作り、兜の中には安曇磯良が海の底から干珠・満珠とともに捧げた霊威尊体を結い込んで、筑前国糟屋郡で初めて甲一冑を着用された。神功皇后が凱旋なされたとき、着用されていた剣などの武具類を英彦山に置かれた。しかしながら、残念なことに天正の戦国の兵火で焼け失せ、兜だけが残った。神功皇后が御征伐のとき、応神天皇を懐胎されており、二代の天子が召されて勝利なさった兜であるから、これを吉祥威霊天下無双の御兜という。養老四（七二〇）年に薩摩の隼人が謀反を起こしたとき、宇佐八幡宮の神託を得て豊前の国主宇努首男人がこの兜をかぶって攻撃したところ、賊徒はたちまち滅んで官軍の大勝利となった。また、弘安の役においても奇瑞をあらわし、国家を鎮護した」という。

・住吉八幡宮(田川郡川崎町の安真木)

社伝によると、「神功皇后三韓征伐ののち筑前宇美の宮にて皇子をお生みなされ、それより京にお帰りなさるとき、田川の地を過ぎられたが、安真木に住・音大神の神霊が現れたということを聞かれて、祭祀を行われたという。もともと住吉三神を祀っていたが、後世相殿に神功皇后と応神天皇を合祀した」とある。

・風治八幡神社（田川市魚町）

社伝によると、神功皇后が筑紫より穴門の豊浦に還幸の際、にわかに風雨が起こったのでこの宮の大石に腰かけ、天神地祇および伊田大神に祈ったところ、難を免れることができたという。風治八幡神社境内には今も神功皇后の腰掛け石がある。

・鏡山(香春町)

『豊前国風土記』逸文は、「田河郡役所の東に鏡山があり、昔、気長足姫命（神功皇后）　がこの山からはるかに国状をご覧になり、天神地祇を祀り、鏡を安置したところ、その鏡が石になった。そこから鏡山と名づけられた」と記している。神功皇后を祭神とする鏡山神社と神功皇后がその姿を映して見たという鏡ケ池がある。

・香春神社(香春町)

延喜式内社で、旧県社。辛国息長大姫大目命・忍骨命・豊比咩命を祭神としている。香春には、香春三山（一ノ岳、二ノ岳、三ノ岳）があるが、社伝によれば、一ノ岳に辛国息長大姫大目命、二ノ岳に忍骨命、三ノ岳に豊比畔命を祀っていたが、和銅二（七〇九）年に一ノ岳山麓に社殿を造営して合祀したという（『福岡県神社誌』）。

辛国息長大姫大目命については、息長帯比売命すなわち神功皇后とは別人と解する説もあるが、神功皇后の通過地にあたっており、その説は誤り。

・仲哀峠

香春岳の一ノ岳から鏡山の南麓は、奈良・平安時代の官道沿いにあたる。鏡山の呉と京都郡勝山町松田を結ぶ峠を、仲哀峠（香春町・勝山町）という。仲哀天皇に由来する。

・仲哀神社

勝山町の下田村字仲哀にある。

・仲哀谷

久保の七曲峠付近。

・赤村

地元の伝承では「神功皇后が応神天皇とともに嘉穂郡の大分の宮から都にお帰りになる際、田川を経て京都郡草野津で乗船しようとこの地を通過されたとき、たまたま風雨が激しかったため、しばらく石の上に腰かけて休憩なされた。このため、昔からの産土神を『風雨八幡宮』と称した。今では村社の『大祖神社』に合祀している」

4、筑豊から豊前へ

・大村（京都郡犀川町）

神功皇后の群臣がこの地で皇后に追いついたために、「追う村」と呼ばれるようになりそれがなまって大村になったという。

・宮の木の生立八幡神社

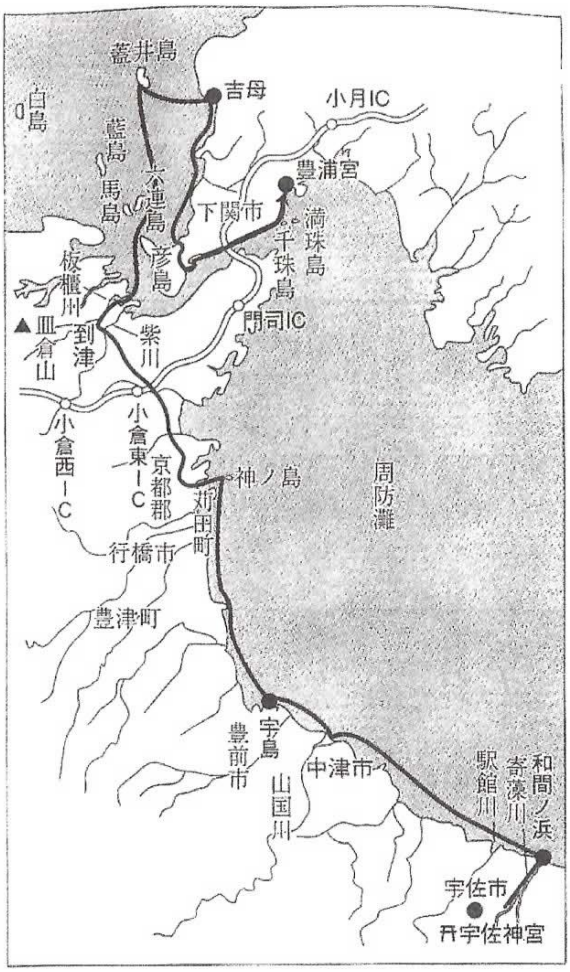
社伝によると、「神功皇后が田川郡からこの地においでなさったとき、皇子が路傍の石に御手をつかれて初めて立たれたので、神功皇后は大層喜ばれ、『すでに生い立つなり』とおっしゃられたのでこの地を『生立』と号した。後世社を建て、三柱を鎮座した。霊石はなお残っている」という。

・蔵持山神社

蔵持山にある。社伝によると、「神功皇后が三韓を征伐なされるとき、上宮三神に祈り、帰国後に日月の鞍を納められたので鞍用山と称したが、後世蔵持山と改めた」という。

・山国川河口の八幡古表神社（吉富町）

小犬丸の八幡古表神社（息長大神宮）には、神功皇后の像とされる「木造女神騎牛像」が社宝として伝えられており、国の重要文化財に指定されている。



牛に乗った神功皇后と妹の虚空津姫命の木像で、鎌倉時代の作と伝えられている。

八幡古表神社は山国川対岸の古要神社（大分県中津市伊藤田）とは姉妹社とされ、ともに宇佐八幡宮の末社とされている。

・山国川中流域の唐原（大平村）

神功皇后が唐原を過ぎて小池で休憩を取った。このため、土地の人々は神功皇后の遺蹟が「久しく香る」という意味を込めて、皇后久香と名づけたが、なまって皇后久坊となったという。また、この土地の西に神功皇后が使ったという泉もあり、近くには大石があって、神功皇后はその石に乗って四方を眺め、山に大きな樹木が繁茂しているのを見て、「船材に用いる丸太を切ろう」といったので、その山を船丸と呼ぶようになったという。

5、豊後における伝承地

豊後の宇佐から国東半島を迂回して姫島を経由して大分平野に出ている。大分川支流の寒田（そうだ）川中流右岸に豊後一宮とされる「西寒多（ささむた）神社」（大分市寒田）があるが、『大分郡志』によると、神功皇后が朝鮮出兵の帰途、西寒田山に登り、一本の白

旗を奉納し、のちに応神天皇のときに武内宿禰が勅命により社殿を創建したという。

6、日向における唯一の伝承地

神功皇后は大分平野からさらに南下して、日向の領域にも足跡を残している。

児湯郡都農町川北にある延喜式内社で日向一の宮の「都農神社」があり、『日向国風土記』逸文によると、神功皇后の新羅出兵に際して、神功皇后は古瘦（こゆ）（児湯郡）の吐濃（つの）の峰にいた「吐乃（つの）大明神」を乗船させ、船の舳先を守らせ、帰国後神功皇后は韜馬（うしか）の峰（尾鈴山）に出向き、男女二人を召し抱えて神主とした、という。

7、豊浦宮へ帰還

八屋の八尋浜

日向の都農からは東九州沿岸部を北上し、宇島（豊前市）に寄港している。八屋の八尋浜には皇后石があり、神功皇后の船が八尋の鰐に守られて順風に恵まれたため、八尋浜と呼ぶようになったという。

・馬洗池

豊前市の馬洗池は、神功皇后がこの地を通過するとき、池の水で馬を洗った所といい、神功皇后が休憩した場所には応神天皇とあわせて若八幡宮が祀られた。

・吉木

吉木（豊前市）は船材を切り出した場所で、素晴らしい楠の大木を見て、神功皇后が、「まことに、良し木」といったことから、吉木という地名になったという。また、横武村才尾は、神功皇后が巡幸の際に仮家を設けた所という。

・舟石・湯越

豊前市の川内に舟石と呼ばれる石がある。神功皇后がこの石の上に立ち、「舟のごとし」といったという。また、湯の迫谷というところには、昔温泉があったが、神功皇后はこの地で温泉につかり、それから四郎丸の山を越えて行ったのでこの峠の名を湯越と呼ぶようになったという。

・神ノ島

京都郡苅田の海上にある小島。神功皇后の船を寄せた場所といわれ、もと住吉神社が祀られていたという。

・到津

到津（小倉北区）の到津八幡神社の社伝では、神功皇后が宇美で皇子を産んだ後、豊浦宮に還幸のとき、当地の津に到ったことから、到津とよばれるようになったという。

・勝田神社・乳山八幡宮

八幡東区にある。神功皇后が戦いで用いた旗を奉納したことから勝旗宮と称し、のちに勝田宮と称するようになったという。勝田神社の近くに乳山八幡宮は神功皇后が応神天皇に乳を与えた場所であるという。

・門司神社(甲宗八幡神社)

門司区にある神社。第一殿に応神天皇、第二殿に神功皇后、第三殿に宗像三女神を祀る。

860年（貞観2年)、大宰大弐·清原真人岑成が勅命により、宇佐神宮にあった神功皇后が着用した甲（かぶと）を御神体として、西門鎮護の要である門司港に近い筆立山の麓に祀ったのがはじまりという。50年に1度の大祭で、御神体(甲)の拝観が行われる。前々回は1958年（昭和33年)、前回は2008年（平成20年）に執り行われた。次回は2058年。

・和布刈神社

門司の和布刈神社において志賀島の安曇磯良など海人とともにワタツミ三神を顕彰した。和布刈神社の社殿の北側に鯛釣り岩があるが、これは神功皇后自らこの岩の上から釣り糸を垂れた場所という。

・蓋井島

その後、船で響灘海上にある蓋井島（下関市）――別名、沖津嘉利島に渡った。『防長地下上申』によると、「蓋井島というのは、およそ五斗も入るかと思われる石のつぼがあり、これに水をためるという。むかし神功皇后が朝鮮出兵の帰路この島へ上陸なされ、このつぼの水を飲んで、なかなかよき水とおっしゃられて、ことのほかおほめになった。それから蓋で覆われたため、蓋井島というようになった」という。

・吉母

吉母（下関市）で、村人が応神天皇のために藻を敷いてさし上げたところ、神功皇后が大層喜び「よし藻」といったことから吉母という地名になったという。

・住吉神社

長門一宮。『日本書紀』には、「軍に従った神の表筒男・中筒男・底筒男の住吉三神は、神功皇后に、『わが荒魂を穴門の山田邑に祭りなさい』と教えていわれた。穴門直の先祖の践立と津守連の先祖の田裳見宿禰が、神功皇后に、『神のおられたい場所を選びましょう』と申し上げた。そこで、荒魂をお祭りするため践立を神主とし、社を穴門の山田邑に建てた」と書かれている。

・豊浦宮に帰還

神功皇后が穴門の豊浦宮に帰還したとき、すでに日が暮れていたので女子供たちが浜辺に出て、灯寵に火をともして神功皇后を出迎えた。豊浦宮＝忌宮神社の「数方庭」の由来である。

8、神功皇后伝承の核心

(1)古代交通の基本的な考え方

神功皇后の経路から、古代交通の基本的な考え方がみえてくる。

陸路をたどる際の特徴として、河川を渡る際、いったん河川に沿って上流の方に進み、上流の狭い川を渡って山の麓沿いに進んでいくケースが多い。古代人は、できる限り山ぎわのゆるやかな道を選びながら峠を越えて、ふたたび別の川沿いの道を下って目的地に向

かう。神功皇后の経路を見ると、このような古代人の基本的な考え方が浮かび上がってくる。

(2)『日本書紀』の編者はなにゆえ神功皇后を卑弥呼に比定したのか

神功皇后には仲哀天皇という夫がおり、夫婿なしとされた卑弥呼と別人であることは一目瞭然である。神功皇后を卑弥呼に比定した決定的理由がほかにあったからではないのか。

北部九州における神功皇后の伝承地は、壱岐・対馬・末盧国・伊都国・奴国・不弥国という倭人伝の国々を網羅し、筑後川流域および東九州の豊前・豊後から日向北部にまたがっている。さらには狗邪韓国まで広がっている。

書紀の編者は、このエリアと邪馬台国の支配領域との間に何らかの関連性を見いだしたのでないか。その結果、神功皇后と卑弥呼を同一人物とみなしたのではないか。

(3)甘木朝倉地方の特異性

甘木朝倉を拠点とした羽白熊鷲をみずから討伐して「心安らか」となり、大己貴神社を創建している。甘木朝倉地域には、蜷城（日代）に景行天皇に関わる伝承も残され、斉明七年（六六一）には斉明天皇と中大兄皇子(のちの天智天皇)によって朝倉宮も置かれている。

四人の天皇・皇后にゆかりのある甘木朝倉地域は、皇室にとって特別の存在なのではないか。

(4)神功皇后ゆかりの氏族

北部九州には、神功皇后に関連した氏族の系譜が伝えられている。

① 菟田の伊賀彦

「菟田（うだ）」出身の舵取りの「伊賀彦」は、神功皇后によって遠賀地方の神職に任じられて住み着いたと伝えられている。その末裔として、祝部、菟田、吉田の三家があり、毎年六月十五日と十一月十五日に伊賀彦を祭る行事が連綿とつづけられてきたという。

② 大三輪大友主君

神功皇后の随行者の一人に大三輪大友主君という重臣がいた。大己貴神社の代々の宮司松木氏は大神姓を名乗り、この大三輪大友主命の末裔といわれる。（ただし、戦後松木氏は神職を退かれ、片田氏が神職を継ぎ、現在では栗田八幡の宮司でもある高（こうの）氏が宮司を兼務しておられる）。

初代大三輪大友主命・・・七十三代松木幸正（一九一一～一九五〇）

・・・七十四代片田昇・・高氏

③中臣烏賊津連（いかつむらじ）と壱岐真根子

神功皇后には中臣烏賊津連という人物も随行していた。「雷大臣」ともよばれる。

『続日本紀』の天応元年（七八一）七月条に、「子公等の先祖は伊賀都臣であり、この中臣の遠い祖先は天御中主命である。伊賀都臣はその二十世の子孫の意美佐夜麻の子である。伊賀都臣は神功皇后の御世に、百済に使者として出向き、その地の女を娶った」とある。

中臣烏賊津連すなわち雷大臣は、『新撰姓氏録』では天児屋命の九世孫、あるいは十一世

孫、あるいは十四世孫とされ、『中臣氏系図』などでは天児屋命の五世孫とされている。一方で、応神天皇の時代に武内宿禰の身代わりとなって自決した壱岐真根子は、『日本書紀』によると壱岐直の先祖とされ、壱岐真根子の父は中臣烏賊津連で、母は武内宿禰の妹の忍媛命と伝えられている。中臣烏賊津連と武内宿禰は、神功皇后に随行していた重臣である。朝鮮半島に対する重要な戦略拠点である壱岐において、中臣一族と武内一族の間の結合が政略的に進められている。

ちなみに、対馬にも中臣烏賊津連の伝承が残されており、雷大臣は対馬にとどまって県直となり、亀卜の術を伝えたという。その子孫が卜部となり、数十家に分かれたが、この阿連の神主の橘氏が卜部の本流という。

阿連川の下流に雷大臣を祭神とする雷命神社があり、現在「ライメイ」神社と読むが、「延書式」神名帳では「イカツチ」と訓を打っている。

雷命神社には若宮神社があり、祭神は雷大臣と百済の女性との間にできた子の本大臣と小大臣であるという。

また、阿連南方の大野崎（厳原町）について、『津島紀事』には、「上世、雷大臣の居れる館の跡、阿連の西南大野壇にあり、大野崎はその崎岸なり。雷大臣は神代の亀卜を伝ふる本州卜部の祖、今も大野崎をもって霊亀を捕る所となす」とある。

④安倍介麿

壱岐の住吉神社の社伝によると、「壱岐国は往古三韓交通の要衝にあたるので、神功皇后は三韓出兵から凱旋なさるとき、舟師を当国に駐屯させられ、鎮護の神として住吉大神および八千曳神（大国主神）を自ら祭られ、敵国を降伏させるため軍越神事を定め、随臣の安倍介麿を駐在させ、祭祀の科として壱岐一国を賜い、永く祭祀を司ることとされた」とあり、対馬と同様に備えのために舟師及び一定の軍卒を配備し、安倍介麿を駐屯させたと伝えられている。

(5)神々への献納

北部九州の神功皇后の経路に沿っておびただしい「腰掛石」の伝承が残されており、また各地で祭祀をおこない、刀や矛、玉、剣、花、兜などの品々を神々に奉納している。

・『日本書紀』によると、甘木朝倉の大己貴神社に刀と矛を奉納している。

・『東松浦郡誌』によれば、神功皇后は三韓征伐の時に松浦の神集島にしばらく滞在し、諸神を集めて、住吉神社に干珠・満珠の二宝を納めた。

・『筑前国続風土記附録』によると、神功皇后は宗像郡在自村の剣塚と呼ばれる洞窟に、剣を納めたという。

・『津島記事』によると、神功皇后は朝鮮からの帰路、対馬の豊において剣と矛を献納したという。

・佐賀郡の與止日女神社の社伝によると、神功皇后は朝鮮から帰還したのち満珠・干珠をこの神社に奉納したという。

・豊前の英彦山神宮には神功皇后が身につけていた二面の兜が古くから伝承されていたと

いう。

・『大分郡志』によると、神功皇后は豊後一宮の「西寒多（ささむた）神社」（大分市寒田）に朝鮮出兵の帰途、一本の白旗を奉納したという。

・門司神社の社伝によると、神功皇后の鎧兜が奉納されたという。

・神功皇后は朝鮮から帰還したのち、下関市の満珠島と干珠島に満珠・干珠の玉石を奉納したという。

(6)禁足地

宗像沖ノ島は現在でも入島が厳しく制限されており、宗像大社の許可を得て、海水で禊をしたのちでなければ上陸することはできない。ただし、古代においてはそのような「不入地」は沖ノ島に限ったことではなかった。

・下関市の満珠島と干珠島も「神の島」として、人々が足を踏み入れることを禁じられてきた。

・対馬の椎根島に島大国魂神社があり、島は陸とつながっており、陸繋部は「不通浜」と呼ばれ、何人も立ち入ることのできない沖の聖なる島とされてきた。

・対馬の琴崎神社では旧暦三月三日の大祭の日以外、この神社に足を踏み入れることは禁じられていた。

このように、神功皇后の経路には、多くの腰掛石と祭祀伝承および不入地のタブーが残されている。沖ノ島の祭祀遺跡は、たまたま絶海の孤島であったがゆえに、また数々のタブーが強力に堅持されてきたためにほぼ当時のまま残存したものであって、古代においてはそれほど珍しい事例ではなかったかもしれない。

(7)神功皇后伝承を補強する遺跡・遺物

神功皇后が甘木朝倉地方において討伐した「羽白熊鷲（はじろくまわし）」は、『日本書紀』によれば、「その人となりは強健で、翼があり高く飛ぶことができる。皇命に従わず常に人民を掠めている」と、描写されている。おそらく、山岳系の人物で、鷲を型取った頭巾をかぶり、白い羽のマントを身につけていたことから、熊鷲と称されたのであろう。

平成七年（一九九五）に佐賀県の東脊振村の「瀬ノ尾遺跡」から、鳥の羽飾りをつけ、くちばしのついた仮面をかぶり、身長の約八割におよぶ盾を持ち、腰には刀剣の鞘らしきものを差している人物が描かれた土器片が出土している。古墳時代前期初頭（四世紀）ごろの土器片と推定されている。鳥の仮面をかぶる風習がこの地方の山岳地帯に存在していたことを示している。もともと鳥を捕獲する際、鳥のはく製をかぶって鳥を油断させるための擬態に由来するものであったろうが、部族や身分・ステイタスなどをあらわす装飾として用いられるようになっていたのかもしれない。

裂田溝・・忌宮神社・香椎宮・大己貴神社・宇美八幡など神功皇后ゆかりの多くの神社の存在そのものが、第一級の遺跡・遺物というべきである。

(8)神功皇后に関わる習俗・行事——灰振り祭・歩射祭

・唐津市の湊の八坂神社では旧暦一月十五日の春季祭に「灰振り祭」が行われる。社伝に

よると、神功皇后が朝鮮出兵のとき海上の霧が濃くて船が進まず、柏の木を燃やした灰をまくと霧が消えたことにちなんで、灰をまいて魔よけを行うようになったという。『古事記』を補完する行事である。

・また、壱岐の「軍越神事」や志賀島、糸島沖の姫島など神功皇后に関わる歩射祭が残存している。歩射祭は軍事演習の名残である。

(9)記紀を補強する地域伝承

逃亡を図った一人の王に向かって神功皇后が矢を射通したため、「射通」すなわ「印通」という地名になったという壱岐の伝承では、逃亡を企てた王は、仲哀天皇の異母弟の十城別王という。これが事実であるなら、朝鮮出兵に反対した仲哀天皇は急死し、その弟は弓で射殺されたことになる。十城別命が死んだ場所は、「死しき」と呼ばれ、「爾自岐」と書かれたが、その後「志自岐」と書かれ、その近くには志自岐神社が祀られている。平戸の志々伎神社も十城別王を祭神としているが、社伝によると、十城別王は朝鮮出兵の帰途この地で亡くなり下松浦明神として祀られたという。仲哀天皇のもう一人の実弟椎武王も出征中に死去したと伝えられ、呼子の田島神社に上松浦明神として祀られている。仲哀天皇の急死は、朝鮮出兵派によるクーデターではないかとする説も有力であり、十城別王と椎武王も朝鮮出兵派による粛正であった可能性が高い。このように、地域の伝承を掘り起こすと、記紀には記載されていない情報を得ることができる。

(10)民衆が伝えた神功皇后伝承

『日本書紀』、『古事記』に対して、謙虚にして真摯な姿勢で向き合わないかぎり、歴史の真相が見えてくるはずもない。一定のイデオロギーによって神功皇后非実在説を唱え、記紀の編者を愚弄し、記紀の記事をもてあそび、複雑でゆがんだ観念論を紡ぎ出したとしても、歴史の真相が見えてくるはずもない。　しかも、民衆――名もない民人たちが、伝承という形で脈々と地域の歴史を伝えている。中央に押しつけられた虚構の話を伝承として残した、というような伝承は一件も見つけることはできない。まさに、神功皇后そのものの伝承として各地に伝えられている。地域の人々が『日本書紀』『古事記』を読んで、伝承を捏造したというような説は成り立たつはずもない。古代人が、壱岐・対馬を含む北部九州の広い範囲で相互に連絡を取り合って神功皇后伝承を創作することも不可能である。

以上、神功皇后は実在の人物である、というのが結論である。